



野槌
中



5
1876
2





人言は互ひに聞や薄

拳の鷹はささむ 秋風

立俣は月毛の駒の影くまて

薬罐は酒よ入てわくあり

休むおと大工左官の群くよ

くぬの中へ嘶く

筆裡雨



存義

李井

柳江

葵足

執筆

尻と尻合せて磯に泊るる

存義

伊豫の花子の早に汐時

華裡雨

親しむは頭字をうり名を呼びて

柳江

喰あしししし鯉のたまりこ

李子井

うら水そ祭の跡は風より家

華裡雨

簾ひとくそ夕日てり

葵足

導して居しむを君の下駄の音

李子井

目下の者よ舟に成や

存義

生柴よ火のようぬる舟乃中

葵足

まゝと申す山成出る月

柳江

所化衆よ聞てを花はまじやれ

存義

春を眠氣の舟やけた人

華裡雨

ちとの間のうら小薬の煮はまり

柳江

晝を福つきの騒く戸袋

李子井

山寺の座敷一とん手あし子

華裡雨

釜くはさねめす人隙

葵足

くらしと時雨て空ハ星はくらし

李井

興津江尻の鯛のひかり

存義

ら旅の中そよほし戀として

葵足

思寸あらし草履をぬく

柳江

牡丹餅小牛ハ餘念とあらし

存義

いかり碎く海をこれ月

葦裡雨

無造作小玉にて礎寸あてやふ

柳江

秋のあまのこゝろぬ六兵衛

李井

峰ひとり越えあらしハ都して

葦裡雨

四月小入水と雪ハまゝ降

葵足

情強所戻して跡ハ薬下やう

李井

いしく拭てとせぬ木枕

存義

居あらし院の馳走ハ夜牡丹花

葵足

獨活とつしひ雨ハ出盛ふ

柳江

(Faint bleed-through text from the reverse side)

竹野のうしへの萩あつそひは
あふひて有無菴そひ赴
を集めたるをきき

三花

色あせぬやうり見せたり萩とく
こちつを來ふと雁の言傳

存義

飯焚八月は名所の生きまて

全

七ッ入子娘のこゝろ三ッ四ッ

三花

夕立は露月あつりふれ九折

全

牛波叱まてし側てひつくり

存義

何てあはれ薪よりひのきのおれ
存義

てとらふ普請田舎寺あり
三花

絶景小頼河ハ杖成置りすれ
全

曇て来くぬ日の暮るのれ
存義

瘦菊残りて玄猪まき
全

稍ともすまはるあはれ
三花

釘のねまこつとんかり見く玉章よ
全

国は綿丸丈とつあり
存義

物毎の自由と温泉場の近き
全

山は座頭連と花のさうり
三花

に一氣さく霞成月のほくと出て
全

真き竿小湯うたの空まむ氣
存義

人宿れ二階の顔のさめ
全

せしめや海と馬士のまき口
三花

叢のまはれ民を戀の民
存義

雪仰山より越後路
三花

幸ひと陣屋の酒の鬼こぼし

存義

はれはし辞世の笑はむ

三花

ことあはれあきと著るは古直衣

全

伴執や尾張の雲静あり

存義

真赤の鯛網光朝てし

三花

いく年ふりし小次又暮るは

全

山伏の月より白く灸して

存義

角のたれし時移り

三花

青い糸の糸は延はる

三花

何處へはゆきてまよふ疫病

存義

てとてとと御製衣うこ尊を

三花

公事小勝る山を雨段め

全

手折てととと先寸花は数十本

存義

春はあそびに達し四阿

全

薺の飽りと見せぬさうり哉

存義

寐坊と起寸露の垣越

和水

あふふ小明荷つゞれ月影小

連馬

硯ハあふと墨筆のさし

龜

童部の迹くゞ元々嘘つたも

和水

らんふと釣まぬ川小釣竿

連馬

あはれ見れ常山のもれは蟬の聲

亀伝

薬研の蓋小蓋はしてわく

存義

氣の足らぬ女子はくもきんとき

連馬

しらふらと往つと泊瀬はつら

吐水

切つての五本の草はきつてあけ

存義

百犬影下りやめし遠近

連馬

酒沽ひふ夜は扉とてしりくと

和水

四拾七騎の切れ談合

存義

神国のうろはしを神おまをぬ

連馬

紵綾や紙子の結構は花

亀伝

わりの大石容ふはち月

存義

何よりれとて汁を初鮎

和水

曳切とて柳ふは似ぬ索すれ

亀伝

彼岸まぐりの人とし鳥

連馬

娘しやふに孫やもくもひおそ

和水

雨はてつはしやむじまは

存義

そら中取らじしる質の物

連馬

旦那おとひの奴ありけり

亀岱

案内もあしぬ早瀬を歩つり

存義

風はうすうよ入 相持るも

味水

間違ひのあもなかしき浮世にて

亀岱

弟の方の聲小極もな

連馬

是きりて月見小袖も出来る筈

和水

ちらりくと暮會所の秋

亀岱

空はこれ赤蜻蛉そありふけり

連馬

船頭あめことあつて船列

存義

三軒と五軒と江戸の茶屋

亀岱

朝日てくくも隅くの埃

和水

此のしとの麓も花のてふこと

存義

松のてふれは鹿の角落

亀岱

むう—誰う處埋きて花野うれ

存義

うち鳴り—や—鉦と松虫

李院

天下殊月のうつ—の水瓶

全

反故の足ら—壁—朽ち

存義

木枯又吹う—あ—つ—

全

あ—ハ蛸の今小か—

李院

わし出して川と新地の走里許

李院

つやゝ宿のくまのけの戀

存義

競馬よ見ゆて被を覗けり

全

山を半も過り雨雲

李院

日の暮ぬうち不行燈出てあな

全

中世のめし坐頭のひらくり

存義

往つ來つ鳥屋ハ神小浜のきり

可因

水うつ先り秋の初りせ

葵足

月のそり晦日乃ありて二日

存義

鹿聞く庵へ米井やふ

李院

頑愚しやれ夏久あしの作花

葵足

とくハ甥と呼てわら

可因

千石多し千石もや乃遠く寸

李院

鎮守の注連ハ引ぬ鳥籠

葵足

暮打とも梅と椿とそり

可因

暗の遅り酒ひとの飲

存義

金屏はあがり物もく古法眼

葵足

海をうりも所久能の石坂

李学院

影やりのさかハッてと有ふれの

存義

小刀磨り門の人立

可因

娶てあんなものを娶しやと布簾に

李学院

くへくいのり一の短尺

葵足

舟出たぬりもふあふ寸風の月

可因

焼くもくりのこきも雀ね

存義

白衣少く鎗はう寸ほも旅も

葵足

何と讚めても喰ぬひつり

可因

生鯛小水そくたふれ朝あじ

存義

岸と奇麗小あり大沙

李学院

さらも花隣屋敷と花をうり

可因

鼓太鼓す春と暮ゆく

葵足

草たつゆ 秋もと又ふ花見うれ

古友

田舎戌二年やうれ藪入

存義

わもひあさ魚化のうもれ白杵平

全

空ハけろりと雪はむ雨

古友

橋きり又容ろく送りを戻されて

全

謹の跡をくくひありあり

存義

二階りく下冬世鬼と別らしき

存義

暮来うつ音のひく藪陰

古友

志やけくや馬とリクと急くや

存義

いきまは糊そさし小音

古友

一ゆりやうく神薬のこころ

存義

猫小嗅お袖のうつり香

古友

高安の万の風は吹て来て

存義

栗のふりまてし木つてあがり

全

爺々婆々乃新と月の四つかり

古友

拾ふもよそ此てあはれ秋

全

山寺れ縁起す花と載て居る

存義

ふと段石小塚ちよる

全

子とも小舟猶長き日の晝上り

古友

水屋にゆめをちよつと愛敬

存義

神垣と行ぬや道小あふり

古友

櫛と柳とやては夏

存義

老懸のよそ目少あつた御隨身

古友

あゝいゝまじと制す百姓

存義

あゝいゝ鶴は額下り日影

古友

積荷流おほ和歌は浦浪

存義

艾火よ足投出してあゝいゝ

古友

月の窓さす娶のいゝはれ

存義

盆の來る半年いゝ夢あま

古友

臥し起つのはまひとら草

存義

舟曳のとも成老ともつんとも

存義

旅のいのちを雨謁の雨各際

古友

雞のあゝ遅しと埒わら

存義

阪よりうへ平宮の常燈

古友

又とあはれ日和をれれ人群集

全

頭中とあう寸春は入相

存義

花摺之萩見了あ〜袖袂

存義

貴賤の笠此暮る殊の日

古來

月ハ洩る水風呂桶此底ぬちて

可因

藁之向風此巢よ運ちあり

存義

樹々深く御代治甲一城の体

古來

相油此色よのく流足輕

可因

調合小千間ふそとてくもくくと

存義

一ねもくく止し旋風

全

冬くまを柳塘とやまに原

可因

西行坊と呼くをふり向く

全

行燈と付す何やり喰て居居

古來

此日和てい型ハ井戸久

全

そくく中張ちししとれ蜘蛛の糸

可因

舊くく尊に布留の官立

全

たくく友野即まうく親の郷

存義

目まを小袖の花ふす成り

全

月と暈田面乃一雁のくく時

古來

彼岸の來ゆを鉦鉄も際

全

土間小まて説經聞の居流きて

存義

らんか序す下部戀はれ

全

沖の帆は風吹すくも汗熱の海

古來

鯛の脛小皿れましくなま

全

常都小成てもやうりとの内

可因

勝手役かきつて寸蠟燭

全

九つと一度そ雪は降出して

存義

狐ころころよはまに松原

全

散子振へけいけいとも聞人さる

右來

釜て米炊く音は管も

全

引窓の細き切目し朝の月

可因

鳥は羽も濡もはゆ霜

全

狩あす松茸山の薄ももち

存義

のへり支度の被尋ぬる

全

内證成智の手紙そとあくと

可因

普請の時小路次とも成る

全

くつほくも代へ若木の花はる

古來

一夜で降りし落つまゝ春

全

名謹屋ふと西と東の御門跡

仙呂

後園も標も二雨のほろ

存義

郭公より此下流をまよ

葵足

曲輪よりひもやうに分あり

仙呂

才代あともつねの味方は二人あり

存義

ひつとあつた僧り占

葵足

若水平瀬の鳴る音と暗き月

仙呂

間の宿とくま裏の秋の野

存義

朝は雪乃長雪隠平 刀持

葵足

既又軍と度々の註進

仙呂

咲く散りくもこの花さかり

存義

兔の徑をくまのほろ原

葵足

捨果し塵のうたせと春を又

仙呂

思直の施主と腰張の施主

存義

田と白田と居るくまのくまの水の跡

葵足

路の芽出し小冬の日當り

仙呂

まきつと月額あつは忌の中

存義

返事とものうた國ふれ状

葵足

さとし火成又暗う寸る夏虫

仙呂

夷の辻子ととも初夜鳴る

存義

耻々しと鼻緒踏えさる前つり

葵足

降来る雨と紋の際つく

仙呂

ちりりと木の間の月の朝茶の湯

存義

軒とともつりて葛黄いね

葵足

馬とて固瀬詣成福らの居て

仙呂

くさくさ一日酒のさりあり

全

招請の毛氈とてさりあり

存義

風ハ欄間に浪のみり

全

花とて舊里所もありし神社

葵足

聞ものともうしと鶏

全

朝うそ芽之小咲る野末うね

存義

あとうつ馬士の露うらあは

泉之

新蕎麥はうさんあまこも位う

輕羅

まんゆとく寸毛出味意致に

山花

隙すくお腰ぬ希役八月と友

潭鳥

塵と友とばうぬ川淀

菊明

瑞籬の真赤小神は威を増す

泉之

今の地頭とわくく禮拜

存義

日の見ぬひもろく牝の字に

山花

山花とくま寸標花と

輕羅

書いし文のむきへり硯箱

菊明

居らるも待てて城は泣く

潭鳥

髪の花の抜れ病ふれねし

輕羅

東海道と稲忠最中

山花

開帳とさしあてて秋は風

潭鳥

障子をとらぬてこちが月

菊明

出りしこすぬ花守とあそび

存義

はじと掘て掘出しり

泉之

狼の栖むと磐手の朝うす

山花

戸を引らせそ齊のゆき

潭鳥

眼鏡屋小目成あつて待暮

泉之

半時をくり晴れ五月雨

輕羅

陣くそ筆を焚て居りりり

菊明

女そ臂多おろの候

存義

湯治ハ戀有地方へ俱しやん

潭鳥

松よ楓そ百雨の庭

泉之

ひるてんとく捨ゆて月を淺

輕羅

親の大臣はしちやぬ秋

菊明

柔麩小袖引こむふ淋しは

存義

終よあんとく鐘の聞ゆれ

山花

深夜の杓うちら乱す草のそし

菊明

一本あしにあり 葭垣

存義

めつちりな聲て童部を叱らと

泉之

手を痛くして敲く鹽辛

輕羅

小田原ハ箱根と出して花の雲

山花

々々と長閑そゆくと乘懸

潭鳥

朝顔之不め見や海人の息

存義

月影うすくむく起の市

酉古

鱸おあすあつこの喰みそ

萬都

落ちて湯うたのころり舞ふ

可因

頻る止む電の跡は風はむら

酉古

壁ハヤしくなまき橋守の家

萬都

手遊ひ成未然小達磨悟らまて

可因

鐘鑄るてこもともや物あり

存義

鹿ハく木五舊アくる奈良京

萬都

造酒頭ハ身じいぬ饅頭

酉古

耳聾し目盲し顔成並居て

存義

宮のつりりれ雨の中さくま

可因

小筋の番よあまりてこりまかり

酉古

石あかりまされ益あふも

萬都

暫しとて月波れ宿に忍び妻

可因

井餘りて遠くハ夜の一炷

存義

はまてあれたる雷平花の雪

萬都

けさき世欲よありし柴賣

酉古

出替酒とくれして置て出らる寸

存義

普請よりれ門の材木

可因

鳶の羽のひらりてと日次より

酉古

婆々の袖ハお釋迦まゝに

萬都

鍼立此禮多々序とまてきしり

可因

洗ふて重次組違てわく

存義

舟泛つて安藝の宮島暮はま

萬都

膝とまきく〜に旅寐忘る

西古

鎗持の甲そ〜似せ〜戀はして

存義

刻々烟草と絶れ雨あり

萬都

柝ちりやまき〜散て〜の月

西古

まき〜改立て虫の〜

存義

泊つて迷懐れと寸菴れ秋

萬都

縋り〜ぬ繩無理之耶

可因

馬ひや寸川の二岸滑ら〜

存義

崩れ〜形小瑞籬るた宮

西古

花の酒追従ひ〜興と増し

可因

傘〜〜走れ〜

全

ふゆのほあつてふゆ武藏野の藤を

存義

月見あつてふゆの客

文魚

秋風小くいづるや障子張えて

葵足

むしりく雀餅をいそぐ

存義

ちんちりと朝日の色も雨あり

文魚

掃除仕者の待と来ぬあり

葵足

伯母御葬のせりしる年の暮

常仙

北張真譜よひゆれ上京

淨阿

松くくり卯は木身ふし星明

存義

人をきつ福平女たの

文魚

ら宿成心のり出る初瀬所

葵足

落來ふ鐘の丁名を降風

常仙

跡々しも尾越の鴨のつるふらん

淨阿

師匠思ひの柚味噌意を

存義

齊とくくくつ果ぬれ朝は月

常仙

翠簾高くと捲上り

葵足

箒目の模様とあじし花一い

文魚

清水の道よめえお草

淨阿

春しつまくく切る鄙ふと野良來

存義

ら流はく疎く戀小かこ

常仙

早汐小引まきて舟は摺ちるひ

葵足

雨と拍子よりとキ寸啼

文魚

盛物のこもり成るうらの小豆粥

浄阿

國を小倉に尼の跡とり

存義

疱瘡を治す病をやめぬを

常仙

合点の買ふ口強り馬

葵足

時雨さく山を隔は甲斐信濃

文魚

櫻木原の月のせほあり

浄阿

夜も寸くし棺改中に圓居して

存義

福つきの尿よやせし天井

常仙

いしをよみ流下れ流き川

葵足

歸洛の後と思ひ出せ景

文魚

育つ子小舟とと年のよぬあり

浄阿

神垣の口下種物と二六

存義

雞の羽風そめくはなれ雪

常仙

くはくちまきこえはの商人

葵足

吹ひく寸色なる衣ゆ風は萩

秋と感して野邊に枯

待す寸と月のあとの言傳

芭よりもも魚のふき

竈もとの半晝出来る年の暮

あかき此明と諷ふ了稚

吐雲

存義

常仙

仙鯉

常仙

米宇

柳千八十四五町下梨さうの

仙鯉

榎のふじしつうあくはる

吐雲

番匠の來る日と酒と買きては

存義

屋敷の姉へ帯かしては

常仙

流氷もく銀の扇と飛鳥川

米宇

秋と半えそ高山雪

存義

そら中礎打出旅のそら

常仙

弓矢を捨しつ菴の月

常我

花鳥や頓河と歌は取り

吐雲

早蕨の手はまゝ幼きは

米宇

雛店は盛し雨の降にたり

存義

神の顔出す尼は懐

仙鯉

ありくと異見の烏帽子地不付

常我

松吹風そ騒しは旗

吐雲

山と山海と海を星明王

米宇

百雨懸し首は痛けれ

常仙

年つすまの庖下人小任せをり

仙鯉

繩乃ゆるりて算滴 水

常我

竹の根の思ひひらきあはれ 崖の上

吐雲

出茶屋出ししとも 鼻の節に

存義

博奕打戀まもしう 身憲すあり

常我

元山 桐油よあはる 音も時雨を

仙鯉

元山と相子に月か入小あり

常仙

温泉の出しと果ぬ談合

米宇

あの中を 謎よは 過てゆく

仙鯉

糊のこもあれて下 豚鷓目

吐雲

御被小添あて 海鹿もともり

米宇

藏平 庫あは人の世盛り

常我

迷つて 眠気残はす 花の春

存義

音もあはれ 吹ぬ 春風

常仙



